

～今月の読み物～

「深川八幡祭り」

株式会社 タツミ建装

小林 功治

深川の夏といえば、富岡八幡宮の「深川八幡祭り」が有名である。お祭りの中でも、3年に一度の大祭に行われる例大祭・連合渡御は、本祭りと呼ばれ、神輿53基が並んで巡行して、沿道の観衆も水を掛けて一緒に楽しむという、歴史と伝統を守った勇壮な祭礼行事である。

私は、富岡二丁目でお世話になっており、平成26年の前回の連合渡御には睦会会長、平成27年からは、町会の神輿総代に名を連ねている。今年、神輿総代として、初めての連合渡御にあたる事から、私の知っている「深川八幡祭り」について紹介する。

富岡八幡宮は、寛永4年(1627年)当時、永代島と呼ばれていた現在地に、ご神託により創建された。周辺の砂洲一帯を埋め立て、社地と氏子の居住地を開き、6万508坪の社有地を得た。「深川の八幡様」として親しまれ、「江戸最大の八幡様」である。

富岡八幡宮の祭礼として行われる「深川八幡祭り」は、毎年8月15日を中心に行われ、1642年から約370年の歴史を誇るものであり、今年の例大祭は8月13日である。

「神輿深川・山車神田・だだっ広いが山王様」と表したとおり、「深川八幡祭り」は、神田明神の「神田祭り」、赤坂日枝神社の「山王祭り」と並んで、「江戸三大祭り」の一つとして数えられている。

その人気は、古くからあり、1807年には当時、木造であった永代橋が、12年ぶりの祭礼日に集まる群衆の重みに耐えきれず、落橋事故を起こした。橋の東側の数間分が崩れ落ち、後ろから群衆が押し寄せては転落し、死傷者・行方不明者を合わせると1,400名以上の被害があったとして、史上最悪の落橋事故と呼ばれている。現在、連合渡御の際、各町の大神輿が永代橋の上を「差し切り」でわたる事は、この時の災害で亡くなられた御霊への鎮魂の為と言われている。

連合渡御は、永代通りに全基集合の後、朝7時半、花火の合図で、富岡八幡宮前にて駒番一番から順に出発し、永代通り～大門通り～江戸資料館通り



江戸三大祭りの一つ「深川八幡祭り」



永代橋を渡る神輿

(小休憩)～清州橋通り～箱崎～中央区新川(大休憩)～永代橋～不動尊前～富岡八幡宮までの約8kmを、神輿と共に練り歩く。今年は53基の神輿が参加するが、2008年及び2012年の連合渡御には、奥州平泉の神輿も参加されて、(奥州平泉は、東日本大震災復興を願い参加された)また、2012年の連合渡御は、天皇皇后両陛下にご観覧頂き、大変な人出で賑わった。



お浄めの水を浴びて、わっしょい!

深川八幡祭りの特徴は、「わっしょい!」(諸説あるが、和を背負うとの意味があると言われている)の伝統的な掛け声に統一されている事。部外者を排除する為、町会で指定された半纏装束以外での参加が認められない事。担ぎ手同士のトラブルを防ぐ為、連合渡御中の飲酒は禁止されている事。また、暑さ避けに水を掛けることから別名「水掛け祭り」の通り、沿道の観衆から担ぎ手に、お浄めの水が浴びせられ、担ぎ手と観衆が一体となって盛り上がる事が特徴として挙げられ、江戸の粋を今に伝えるお祭りとして、多くの人々によって大切に受け継がれている。

次に、項目別による「深川八幡祭り」について紹介する。

<当日人数>

連合渡御当日は、担ぎ手が各町400人～700人程度集まる。53基が揃うと約25,000人を超える半纏を着た担ぎ手が集まる。それを観覧する観衆で、深川の町が賑わう事となる。前回の2014年は、なんと観衆32万人と発表がある。経済効果は???すごい!

<祭礼規模>

氏子町会が53町会と多く、面積も大きい。そして当日の道中は8kmにわたる。その規模は江東区と中央区の2区にわたり、所轄警察署は、江東区の深川警察署をはじめ、中央区の中央警察署、久松警察署の3所轄署で受け持たれる。また、所轄消防署も江東区の深川消防署をはじめ、中央区の京橋消防署、日本橋消防署の3所轄署にわたる。また、神輿は一度に巡行するわけではなく、順に進行していくので、定位置で観覧出来れば、2時間以上(各町3分として53基で159分)は各町会の神輿を見る事が出来る。



連合渡御出陣式

<祭礼費用>

各町で祭礼費用として寄付を募り、その浄財を連合渡御 開催費用や、それに付随する準備調達費



2014年の観衆は32万人(朝の集合)

用・備品消耗費用・直会費用・神輿修繕積立金などに当てる。大体、各町400万円以上で、宮元・富岡一丁目は1,000万円をはるかに超える寄付があると聞く。その総額費用は53町会で約3億円に上ると思われる。それが全額ではないが、ひと夏の3日程度で支出する訳である。華やかで素晴らしい勇壮な祭礼であると言える。

<宮神輿>

富岡八幡宮の神輿蔵に納められている神輿で、向かって左が「御本社一の宮神輿」、向かって右が「御本社二の宮神輿」である。一の宮神輿は1991年、総額10億円(鉄筋コンクリート造の神輿蔵も含めて)といわれる黄金に輝く日本一大きい宮神輿である。神輿は行徳の第16代 浅子周慶氏により製作され、台輪151センチ×屋根289センチ×高さ439センチで重量4.5トンの千貫神輿です。装飾には、ダイヤモンドやルビーが入り、屋根は純金24kgを使用した超豪華な神輿である。二の宮神輿は1997年に奉納された。こちらも第16代 浅子周慶氏による製作であり、台輪136センチ×227センチ×高さ327センチで重量は2トンの神輿です。こちらも鳳凰の目にダイヤモンドが施してある。現在、二の宮神輿が影祭りの際、祭礼に使用されている。

<各町神輿>

各町では、大・中・小の神輿をそろえている町会も多く、製作費用も何千万円と掛かっている。この各町全体で持っている芸術品だけでも15億をはるかに超える。その神輿については、どの町会も同じものではなく、それぞれの特徴は、この紙面では書ききれない。是非、自分の目で見ることをお奨めする。富岡二丁目の神輿について紹介すると、御本社神輿と同じく第16代 浅子周慶作であり、平成元年、町会の長年の夢であった大神輿が完成した。台座76センチ、屋根は、延黒漆塗り、胴体には天の岩戸・スサノオノミコト・ヤマタノオロチ、台輪四方には四神(青龍・白虎・朱雀・玄武)の彫りが施され、^{わらびて}蕨手は鯉の滝登りの彫りに差し分けメッキが施されている。鳳凰は羽を大きく広げて、今にも大空高く飛び立つ浅子型といわれる勇壮なものである。飾り綱は落ち着いた紫色に金茶の綱掛けで、大神輿が一層豪華で品位あるものとなっている。

私の思い出としては、1989年 神輿納受式の際、大神輿を引取りして、当社の新車の2tトラックで行徳から富岡まで運搬した事である。大神輿という立派な芸術品を運搬していく道中、他の車両や、通行人からの羨望の目で見られた事は、大変ありがたい気持ちになった事を今でも覚えている。その当時、なんと私も26歳と若かった！

<本祭りと影祭り>

本祭りは3年に1度で開催され「大神輿 連合渡御」が行われる。今年が本祭りの年に当たります。本祭り以外の2年間は影祭りにあたり、本祭りの翌年には、前述の「御本社二の宮神輿の部会渡し」という方法で、御本社神輿を担ぎわたす。御本社二の宮神輿は大きく、また担ぎ手の人数も町会大神輿の2～3倍の人数で担ぐので、見ても立派さに圧倒される。その翌年は「子ども神輿連合」が行われ、永代通りを門前仲町交差点から富岡二丁目交差点までを交通封鎖して、当日の午前中に子ども神輿だけ

で連合して担ぐ行事。本祭りの連合渡御の参加する予備軍を養成する行事である。もちろん、水はたっぷり使用しますので、はしゃぎだす子どももいれば、泣き出す子どももいて、反応はさまざまである。毎回、子どもが熱中症にならないように気を遣っている。



富岡二丁目の神輿（差し上げ）

<神輿総代連合会>

富岡八幡宮の祭礼に参加する神輿は、「富岡八幡宮 神輿総代連合会」で取り仕切っている。連合会の会長（現在は鷺田様）を中心に、顧問・相談役・副会長・幹事長・常任幹事・幹事などの54名で構成されている。幹事総代は、神輿総代の代表として各部会から推挙され、連合会で承認される。富岡八幡宮の祭礼は、連合総代会において決議された内容に沿って、各町会で粛々と、準備や運営が行われる事となる。月次祭のある毎月28日に連合総代会が開催される。



大人数で神輿を担ぐ

<部会>

連合会は一部会から七部会まであり、53カ町会がいずれかの部会に所属している。私の富岡二丁目是一部会に属している。部会の分け方の定義は不明であるが、地域で分けている事は理解出来る。一部会は永代橋を過ぎてから八幡宮一帯までの地域となっている。いわば、富岡八幡宮のお膝元である。永代通り沿いで一番の花形町会の部会であるといえる。その分、仕事量も他部会と比べても多いが、その分、まとまりのある部会である。

<神輿総代>

各町会より選出された神輿総代を指し、前述の連合総代会の所属組織となる。富岡二丁目町会からは、私を含め6名が選出されており、内1名が幹事総代に就任している。当町会からは2班の東京ベニヤ(株)初会長が幹事総代、6班の(株)田辺商店の田辺社長、1班の三幸林産(株)の馬田社長が、木材問屋組合関係で神輿総代でもご一緒である。一部会としての神輿総代は52名いらっしゃり、他各部会も相当数の神輿総代がいらっしゃり、全部会全員で303名が神輿総代として連合総代会に属している。



富岡二丁目 神輿総代の筆者

<担ぎ手>

神輿連合渡御に中心となってご協力して頂く方々である。揃いの半纏装束に合わせる必要があるが、各町会それぞれに特徴がある。半纏一つ取っても、文字入れ・デザイン・色など特徴がある。富岡二丁目町会は、藍地の半纏に背中の大紋は勘亭流「富岡二」の白色ヌキ字、裾廻りは、縦10本線に横3本と2本の線で「トミニ」を表したデザインである。襟元は、すっきりと「富岡二」のヌキ字である。富岡八幡宮の祭礼で半纏の前・後ろに「富岡」が入っているのは当町会だけであると少し自慢しておきたい。そして、当町会は、担ぎ手の皆さんを大切にしている。担ぎ手が楽しいと思って頂く事に注力している。世話役の指示に従うなど、ルールさえ守って頂ければ、どこでも好きなのところを担いで頂く。花棒だってどんどん担いで頂く。みんなが楽しくて笑顔になれるのが祭りであると考えている。だから、毎回、すごい人数が来て頂ける町会となっている。前回は永代橋付近で、およそ700～800名が神輿に取り付いていた。壮観な光景であった事を覚えている。また昨年、DVD制作委員会で、昭和初期の本祭りを控えた深川の様子が、NHKのアーカイブとして残っており「この夏の本祭りを見越して、今から、入れ墨に興じる担ぎ手衆です」の様子を見た時には、非常に驚いた。それが普通に行われていた時代であったのだろう。

<寄付>

各町で祭礼費用として集めるものであり、集金の方法は、町会ごとに異なる。富岡二丁目は、住人各戸を訪問して集金をする。もちろん、大口や、企業からの寄付も受付けるが、当町会では、連合渡御に向けての恒例行事であり、住人から直接のお声が聴けるチャンスでもある。ねぎらいや応援のお声掛けを頂くと、本当に嬉しいものである。町会ごとに必ず「奉納御芳名看板」が設置されている。これを町会ごとに見て回る事も面白い。知っている名前・店舗・会社を見つける事や、奉納金の金額や、御芳名者



富岡二丁目町会 神輿総代の筆者



半纏・前



半纏・後ろ



担ぎ手の皆さん

の多い・少ないが分かったり、また、掲示物から町会の特徴が分かったりする。そして、看板の一番上位に記載される名前を「筆頭^{みでがしら}」と呼び、その町会で最高の尊敬を集めている。私が崇拜している方で、3ヶ月の福沢諭吉を奉納される方もいらっしゃる。また、木場五丁目町会は、今年の連合渡御が駒番一番で、早々と4月末から奉納看板が設置されている。流石にすごい気合いが入っている。

<水掛け>

「深川八幡祭り」に水掛けは必要不可欠です。最初は暑さ避けから始まったと思われるが、沿道の観衆と神輿とが一つになって楽しめるアイテムである。水掛けは楽しい。童心に返って楽しめるからだと思う。また、当日は水を掛けても怒られないところが良い。もちろん警察官に水を掛けても怒られない。だからと言ってむやみやたらと掛け捲ると、仕事に支障がでるので注意が必要。

また、消防団の皆様にご協力頂き、消火栓からの放水を体験できる。消火栓の水圧は高く、直接放水を浴びた場合、身体ごと飛ばされてしまうので、上空に放水した水の下を神輿が通る、というアトラクションになる。神輿での水掛けは「地上で水中を体感」出来る。これが当日5～6か所で行われており、その他10tトラック車に水満載を一気に掛ける町会もあり、水掛けに関する様々なアトラクションが楽しめる。当町会も水掛け用2tトラックを2台スタンバイしておく。この夏は、水不足にならないことを願うのみである。



消防団の皆さんによる放水

<担ぎ方・演技>

神輿の掛け声は「わっしょい！」で統一であるが、担ぎ方は、種類がある。まず、平坦地を担ぐ場合、長距離の場合などが「平担ぎ」といわれている2テンポの「わっしょい！・わっしょい！」である。神輿の担ぎ出しの場合や、神輿を早く進ませたい場合は「早掛け」といわれ小刻みに「わっしょい！・わっしょい！・わっしょい！・わっしょい！・わっしょい！」と刻む。そして、神輿の演技として「揉み」と「差し上げ」がある。「揉み」は号令と共に、神輿棒を肩からはずし、両手で抱えて膝まで降ろす、その後、頭の高さまで持ち上げる、この動作を2・3回行う。掛け声は「もーめ・もーめ」である。「差し上げ」は神輿を一気に頭上まで持って行き、手の平で担ぎ棒を支える。出来れば片方の手で、担ぎ棒を叩く。掛け声は「さーせ・さーせ」である。通常は「揉み」と「差し上げ」はセットで行われる事が多い。これら担ぎ方と演技を組合せることによって、メリハリのある、また楽しい巡行が出来るのである。前述の永代橋の橋上で行う、鎮魂の為の「差し切り」は神輿の花形である。ここを無事に巡行させることがポイントとなる。また、顔を



神輿を担ぐ筆者

上げて、手を振り、足が揃っている事が、神輿担ぎが綺麗に見えるポイントである。当町会では、「わっしょい！」の「わ」で右足を出すという事を共通としている。いつでも合わせる事が可能となり、綺麗に見える工夫をしている。

<女神輿>

富岡二丁目では、「女神輿」も有名である。連合渡御の最中に、女性だけで神輿に肩を入れて頂く。通常の神輿巡行では、男性が主体で担いでいるので、女性が入っても肩に届かない場合が多い。そこで、4、5回女性だけの神輿巡行をして頂く。女性だけなので、皆さん肩に担ぐことが出来て、揃えば綺麗この上ない。そして、廻りの男性も散らすので、カメラマンが、ワンサカやってくる。女性なので、皆さん笑顔でカメラに収まるのは上手である。それを、清洲橋や、門前仲町交差点過ぎという「メインの場所」で披露して頂く。女性陣は、なおさら元気で笑顔が増えるし、それを見て男性陣も喜んでいる。楽しさの相乗効果である。

<駒番>

今年の駒番表を掲載する。注意して見るとわかるのだが、四番と四十二番が抜けている。シニバンとって番号が嫌われているからである。駒番表の製作者は、木場二丁目在住の「柳澤秀亭さん」である。江戸文字・勘亭流の大家でいらっしゃる。お忙しいところ、無理を言って、富岡二丁目の奉納看板も、神輿駒札も製作して頂いた方である。本当に感謝である。「柳澤秀亭さん」から頂いた、神酒所飾りも合わせて紹介する。

<総評>

色々書いてしまったが、神輿は見て楽しむよりも、参加して楽しむ事を、是非お奨めしたい。一緒になって担いだり、水掛けしたりで楽しみを味わって頂きたい。お祭りは、みんなが楽しくて笑顔になれるのが一番であり、楽しくなければ祭りではない。私も今年、神輿総代として初めての、記念すべき連合渡御である。町会としても初参加から数えて、10回目の記念すべき連合渡御である。本当に今年の8月13日が楽しみになってきた！！



お祭りは笑顔が一番！ みんなで「わっしょい！」

最後に、お祭りという神事は、品格を重んじ、歴史と伝統を守りつつ、楽しさを後世に伝えていく必要性を感じている。次回の本祭りは、2020年オリンピックイヤーである。これからも楽しみが続くそうである。『わっしょい！』

